

九州派機関誌三号

桜井孝身

「これでも絵だろうか」と言えば「絵ではなくても結構」と大きく出る奴がいる。「じゃ、おまえは、絵でない何を描こうとしているのだ」と言えば「だから、頭の悪い連中と知りながらも、グループを組んでいるではないか」という。そういいながらも、人の好い私たちは「ただできえ生きにくい世渡りをしながら、しかも女房、子供を食わせなければならぬのに、何故にまた、絵など描いたりするのだろうか」と考え、またしても、勉強不足、人生観の相違から 見解の相違に至るまでの、怠屈な問答を始めるのである。

その一人は、東京の批評家が色刷りで外国の作家を論ずるように、美術手帖を見て東京をはかる。色刷りの誤り、大きな書面を、驚くばかり縮小してみせる印刷の、魔術の虜になりながらも、勇敢に、しかも確信にみちた態度で我々をリードする。

実際、前田常作、小野忠弘の色刷りを見たときは「これこそ芸術だ」と感激したが、同時に、張りつめた気持が砂のように崩れて「これなら、俺たちだって描けるじゃないかと」とガッカリした。僅かにクレーを工芸化しただけだ」「アン・フォルメル止揚とまでは行けず、無意識に、ちょっとストップをかけただけだ」「これなら、全然意識の違う我々の方が見込みがあるぞ」と、アツカマシイが、真実私たちはそう考えたのである。

その一人は、東京の書家がパリを憧れるように、東京で死にたいと願っているが、彼の東京をまねた絵が、本物より本物らしくなれば、下手な時でも、西脇順三郎が訳すれば、なんとなく有難い理屈で、その時は、パリできえも驚かすことが出来ると信じている。

そういう意味では、我々は、1600 軒の錬金術を愛する。愛するがゆえに、技術と知識が必要になり、またいろいろな尺度を作って、どれが本命かを探るのである。

その一人は「現在の世界の歪みは、故意に尺度を壊した、いわば資本主義による歪みだが、それをもっともらしく口にするのを、文化人だと勘違いしている者が多い」となげき、かつて人々が、山や川を愛したように、拘置所の壁のシミや、踏みつけられた舗道の面しか愛しないアン・フォルメルを、明確に否定して意識より強く意欲されない書面、意欲されない人生なんかマッピラだ」と宣言する。

その一人である私は、一体何が描きたいのか。私は、絵であるとか、詩であるとか、そんなことは、どうでもいいじゃないかと思う。それは、いままで絵であり、詩であっただけである。私が、タダ やシュールに感激するただ一つの点は、フロイドが、詩人でも

書家でもなかったという事実に過ぎない。

抽象絵画は、対象を一切排除するといいいながら、ふん囲気を切りすてることが出来ないでいる。だから、エレガントな、趣味性の強い絵が氾濫するのだ。これでは五十歩百歩、日展と、どれだけの距たりがあるであろうか。私は、現在の、この故意に混乱させられた時代を、一枚の紙と見て、鋭利な刃物で気儘に切り抜いていくが、切り抜いていけば、必然的に、形は明確にならざるを得ない。そこには、明確な形がともなってくるころの、新しい倫理観念に裏づけされた、新しい人間像が打ち建てられると思う。その、新しい人間像の上に立つことが、人工衛星以後の我々には、何にもまして重要なことではあるまいか。